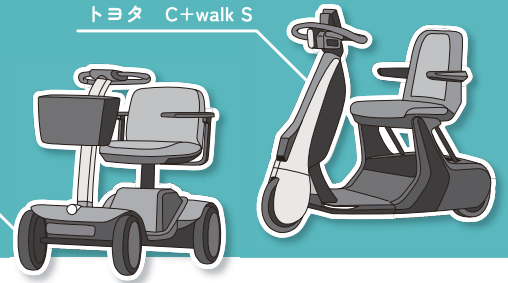


出雲大社周辺における観光まち歩きの促進にむけた新たなモビリティ活用可能性の検討

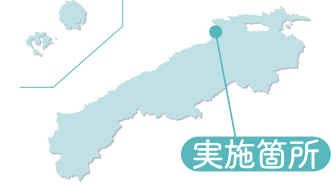
佐藤亜美・福井のり子・須山侑子／株式会社バイタルリード 出雲市超小型モビリティ導入等社会実験協議会



1 背景と目的

- 出雲大社の参詣道である神門通りは、平成22年にシェアド・スペースの整備が進められたことでまち歩きが促進され、観光客が増加している。また、近年は出雲大社から約1.5 km離れた稲佐の浜への来訪者も増加しており、観光客の行動範囲が拡大している。
- しかし、出雲大社周辺の交通手段は限られており、高齢者等の徒歩による長距離の移動が難しい方にとっては、観光周遊が難しい状況にある。
- 本実験は、高齢者等の観光客を対象にシニアカーを貸し出し、観光満足度や走行中の安全性等の検証を行った。

実験地域の概要



- 島根県出雲市大社町杵築地域
- 人口 4,914人(令和6年3月末時点)
- 来訪者数 616万人 (令和4年度 島根県観光動態調査)
- 出雲大社と稲佐の浜を結ぶ約1.1 kmの道は「神迎の道」と呼ばれ、観光周遊ルートの一部となっている

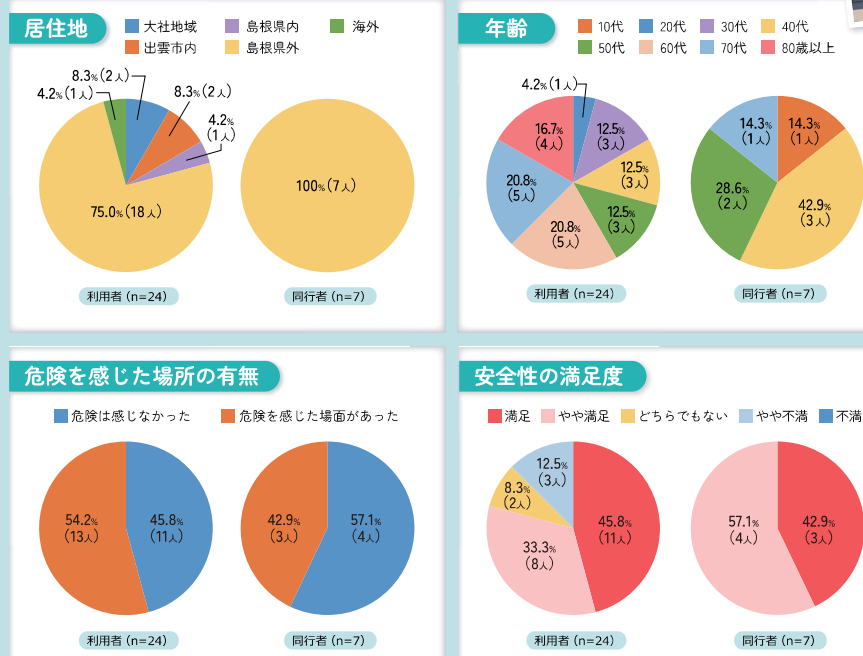
2 実験の概要と調査結果

実験の概要

- 実験期間 ▶ 令和5年11月3日(金)～11月12日(日)のうち5日間
- 貸出車両 ▶ トヨタ C+walk S 2台
▶ WHILL Model S 2台
- 貸出場所 ▶ 一畑電車出雲大社前駅の横にあるポケットパーク
- 料金 ▶ 無料
- 推奨ルート・駐車場所 ▼



アンケート調査



利用状況

貸出日	利用者数		
	トヨタ C+walk S	WHILL Model S	計
11月3日(金)	2人	3人	5人
11月5日(日)	2人	2人	4人
11月7日(火)	3人	1人	4人
11月8日(水)	3人	4人	7人
11月9日(木)	3人	1人	4人
合計	13人	11人	24人

1日あたり
4.8人

GPS計測



- シニアカーでの移動は、多くの人が推奨ルートを走行していたが、国道431号などの別のルートを走行している人も見られた。
- シニアカーを駐車してからの徒歩移動は、出雲大社の境内や稲佐の浜で多く見られ、神門通りや神迎の道の店舗周辺での滞在も見られた。
- シニアカーの利用により、神門通りだけでなく、稲佐の浜などの広域の観光エリアを回遊していることがわかる。

ビデオ観測調査

- シニアカーを見つけて回避行動をとってから、実験車両がその場所に到達するまでの時間(PET値)や急ブレーキ等のヒヤリハットの発生回数を計測
- 錯綜現象は計67件確認されたが、このうち危険と判断できるもの(PET値1秒以下)は1件
- ヒヤリハットは計10件発生し、このうち危険度が高いもの(高・中)は6件

錯綜現象 (PET値が低い上位3件)				ヒヤリハット (危険度の高い6件)			
PET値(秒)	判定	場所	状況	危険度	場所	状況	
0.96	危険	神迎の道	子どもが横を見ながら歩いており、保護者の声掛けでシニアカーに気づいて避けた	高	稲佐の浜付近	交差点での自動車との衝突回避	
1.15	安全	神迎の道	歩行者が横を見ながら歩いており、シニアカーに気づいて避けた	高	神迎の道	変則交差点での自動車との衝突回避	
1.52	安全	勢溜付近	歩行者2人が立ち止まり、シニアカーが停止 2人のうち1人がシニアカーに気づき、もう1人に声をかけ避けた	中	神門通り	歩道の白線ギリギリを走行する自動車との衝突回避	
				中	神門通り	渋滞している車の間(横断歩道ではない場所)から出てきた歩行者との衝突回避	
				中	神門通り	ハンドル操作を誤り、前方を走行するシニアカーと衝突	
				中	稲佐の浜	ハンドル操作を誤り、シニアカー駐車場所のポールに接触	

出雲大社周辺における危険箇所

- 神門通りなどの歩行者が多くいる場所に集中している。
- 神迎の道などの狭い道路においても利用者が危険を感じたり、ヒヤリハットが発生している。
- 錯綜現象・ヒヤリハットのいずれも、利用者への安全な利用方法、危険箇所の説明等により、その多くが危険を回避・減少させることができると考えられる。
- シニアカーの安全性の確保には、歩行者や自動車への注意喚起も必要である。



3 今後に向けて

- 出雲大社周辺におけるシニアカーの貸出について、安全対策の課題が浮き彫りになった一方、観光周遊手段としての活用可能性が高いことが確認された。
- シニアカーは、徒歩での移動を補完する福祉的役割を持つモビリティであり、出雲大社周辺エリアを訪れる誰もが観光を楽しむことができる環境づくりにつながるものである。
- 今後、車や歩行者等とシニアカーが共存していくための安全性の確保に加え、利便性の高いサービスを検討する必要がある。